



▲中筋川と国見地区を望む

背景

義民とは、一身を犠牲にして世のため人のために尽くした人のことです。中筋川流域では、昔から水害が多発して、農民は困窮こんきゅうしていました。国見村の庄屋だった中平宗兵衛は村人に対して耕作に精を出すよう励ますとともに、藩に対しては田畑が浸水した時には捨地として年貢を納めなくてもいいように働きかけていました。三年連続の大洪水で村人が困窮している年に、またもや洪水が起きました。この年の検見（役人が来てその年の作柄から税金を決めること）に際して、宗兵衛は村人のためを思い、検見役けんみんに凶作地ばかりを見せて、年貢を少しでも減免してもらうように計りました。

アクセス 天満宮

- 土佐くろしお鉄道国見駅より西へ直線距離約1km
- 四万十市国見
- 緯度経度 北緯32度58分49秒、東経132度52分48秒



今から三〇〇年以上も前のことです。中筋川沿いの国見村（現在の四万十市国見付近）は元禄一三年（一七〇〇）、一四年（一七〇一）、一五年（一七〇二）と連続の大洪水で、村人は山を売り、田を売り、屋敷を売って、草の根まで食べて命をつないでいる状態でした。明けて宝永元年（一七〇四）、今年こそはと思っ

ていると、七月に三度の洪水に遭い、絶望のどん底におちいりました。しかし、こんな年でも役人による検見は受けなければなりません。

宗兵衛は老役の弥助と相談して、検見役に凶作地ばかりを見せて、年貢を少しでも少なくしてもらうことを計画しました。検見役が来た時、二人は「国見の七まがり」という道の谷にある劣等地を見せたり、上作地の「森の松」と劣等地の「沖の松」を取り替えて、減免を願ったりしました。それは村人のための苦肉の策で、誰一人として密告する者はいないと思われましたが、その時、東の丘の上から「宗兵衛、弥助は森の松と称して検見方をだます者」と叫ぶ者がいました。役人は感じて二人に詰問きつもんしました。

二人は、永年の凶作に村の困窮は極限に達していると述べ、特別のご慈悲を願いましたが、聞き入れられず、役人は二人を捕らえようとしてきました。弥助は逃げることはできましたが、宗兵衛は捕らえられ、高知に護送され、宝永二年（一七〇五）二月二日斬罪ざんざいに処せられました。

しかし、宗兵衛の死は、検見方を反省させることになりました。宗兵衛の訴えが聞き入れられ、国見の土地は捨地として明治九年（一八七六）の地租改正まで減免され、村人の生活に偉大な功績を残しました。村人は宗兵衛の徳を慕したい、社殿を建ててその霊を祀まつりました。これが若宮神社（現在は天満宮あまのみやに合祀）です。